

Key words :

遠山郷（下栗、民宿『井戸端』）、天竜川、赤石岳、隕石クレーター、アニメ『君の名は。』、リニア中央新幹線、JR 飯田線秘境駅、岸田國士・飯田讃歌

信州三大秘境の一つと言われる遠山郷（とおやまごう）は、天竜川の支流・遠山川の流域（旧南信濃村と旧上村）を指す。人々は、遠山川の谷あいを開けた村〈上村、和田〔標高 400-600m〕〉と山腹に点在する村〈下栗（しもぐり）、大野〔標高 1000m〕〉に暮らしている。遠山郷は傾斜地集落の眺望や 12 月の霜月祭などが有名だ。南北に走る中央構造線が赤石山脈と伊那山地を二分しており、中央構造線に沿って秋葉街道〔秋葉神社⇄諏訪大社〕（国道 152 号）が走り、上村や和田の旅館には今も旅籠の名残がある。秋葉街道はかつての塩の道「遠信古道」で起源は縄文時代に遡る。遠州から塩、諏訪和田峠から黒耀石が運ばれていた。飯田ゆかりの柳田國男（旧飯田藩士・柳田家の養嗣子）は秋葉街道について「我々から言うならば寧ろ諏訪路とも、遠山通りとも呼んでみたい」（『東国古道記』1952 年）と述べている。

下栗は遠山川の深い谷を見下ろす傾斜地にある集落だ。大井川上流部から赤石山脈の茶臼岳を越えてやって来た狩猟採集民が、最奥の大野に住みついたのが村の始まりと言われている。その後西へ一里ほど移動して現在の下栗に定住し、焼畑農業を始めた。傾斜は急だが南向きの斜面なので、日照時間が長く畑作に適していた。3 つの水源（上井戸、中井戸、井戸端）の周りに集落が作られた。



<下栗集落（撮影は全て 2018 年 7 月）>

村人の大半は大麦や雑穀を主とした畑作に従事している。穀類は大麦、トウモロコシ、蕎麦、粟、ヒエ、キビを、野菜等は大豆、ジャガイモ（二度芋）、コンニャク、野沢菜、赤石茶、桑などを栽培している。斜度 20~40 度の急斜面の耕作地では、土が流れないように様々な工夫がなされている。1) 畝を等高線状に作る（等高線耕作）。2) 常に下から上に土寄せする。3) 畑地の間に茶などを植える。4) 輪作を行なう。大麦を秋に播いて翌年 6 月に収穫し、雑穀や豆類を 6 月から 10 月にかけて栽培することで畑が裸地になる期間をなくし土壌の流出を防止している。（野中健一『長野県下栗地区における山村生活誌』1992 年）

我々に馴染みのある人たちも下栗を訪れている。深田久弥は長野県側から光岳へ登る前に泊まり、案内人を雇っている。下栗は深田久弥お気に入りの村だ。冠松次郎は戦前 5 本の文部省山岳映画に関わり『赤石岳』（1929 年）の撮影では下栗ののんびりとした景色が印象的だったと語っている。民俗学者宮本常一は『山に生きる人びと』（1964 年）の中で繰り返し下栗を取り上げている。漫画家つげ義春は 1973 年 4 月、秋葉街道取材旅行（上村→大鹿村→高遠）の際、聖岳を背景にした下栗の写真を撮っている。紀行作家岡田喜秋も『山村を歩く』（1974 年）で下栗に泊まっている。

2005 年の広域合併で遠山郷も飯田市になった。飯田市は人口 1 万人に対して 5.32 軒の焼肉屋がある「焼肉屋比率日本一の町」（2013 年総務省調査）だ。理由はいくつか挙げられている。1) 山に囲まれた飯田は昔から熊、猪、鹿などの山肉への嗜好が強かった（遠山郷には星野屋など今も山肉を売る店がある）、2) 満蒙開拓団で満州へ渡ったのは伊那谷出身者が最も多く（下伊那郡阿南村「満蒙開拓平和記念館」資料）、その人たちがジンギスカンを持ち帰った、3) 戦中、天竜川の平岡ダム建設の為にたくさんの朝鮮人労働者が働き、彼らから焼肉のタレを学んだ。飯田市民の焼肉好きは本物で、ジンギスカン用の鉄鍋（中央が盛り上がった鍋）は一家に一個あるとのこと。

【1 遠山郷・下栗】

《東京⇒豊橋⇒平岡⇒上村⇒下栗》

初めて遠山郷を訪れたのは、41 年前の 1978 年 1 月だった。下栗という赤石山脈の仙境へは当時

住んでいた東京から丸一日かかった。豊橋駅で新幹線から飯田線に乗り換え。車内の物売りのおばちゃんが連結部に座り込んで弁当を売っているのを見て、アンデスの高原列車かと思った。飯田線には秘境駅がいくつもある。乗降客のいない駅を列車は律義に停車していく。佐久間ダムを過ぎ長野県にはいってしばらくすると平岡駅に着いた。3時間近い天竜川を眺めながらの鈍行旅だ。平岡は遠山郷の南の玄関口となる。ここから路線バスに乗り秋葉街道を北上し上村で下車。

この先は歩くしかない。上村小学校〔標高 564m〕横から下栗〔標高 1000m〕まで標高差 400m 強、7km の道を、雪がちらつく中、3 時間かけて登った。こんな山奥に本当に村があるのだろうかと思ひ不安になりながら歩き続けた。突然視界が開け、20~40 度の急斜面にへばりつくような畑と家々が現れた。山上の集落なのに、天に向けて両手を広げたような伸びやかさに驚いた。当時村で唯一の民宿『井戸端』に泊めてもらった。夕食はマトンのジンギスカンだった。



<『井戸端』から聖岳>

翌朝は晴れ。宿の前からはピラミダルな聖岳〔3013m〕が谷奥に望めた。下栗で一番高く開けた場所〔1060m〕に上村小学校の分校があった。子供たちの声が山あいには響いていた。村に滞在し、風土に合った穏やかな暮らしを大切にしている人々の様子を見て、すっかり魅せられてしまった。『井戸端』の野牧さんは当時 60 代後半。20 代の僕にはどう見てもおばあさんだったが、みんなは「おばさん、おばさん」と親しげに呼びかけていた。温かく話し好きで大正琴をたしなまれる上品な女性だった。『井戸端』は野牧さんがひとりで切り盛りしていた。晩御飯の支度を手伝ったり、

突然やってきた野牧さんの親類と酒を飲んだり、まるで実家に帰ったような気分だった。その後『井戸端』のおばあさんを訪ねて足しげく下栗へ通うことになる。最初は独りで行き、次に友人や家族と訪れ、ワングル同期の渡辺君（17 期）を誘うこともあった。それまでは山のピークにしか関心がなかったのに、前衛の山やそこでの村人の暮らしに興味を持つようになった。

通い始めた頃は、まさに下栗の大きな転換期だった。麓の上村から自動車道が開通したのが 1960 年代、最奥の大野まで延びたのは 1985 年。道路のお陰で生活は格段に便利になった。それまで行商人が山道を通して生活用品や食料品を運んでいたのを、車が取って代わった。そして、その道路を通して人々は、仕事や教育の機会を求め村から去って行った。

【2 赤石岳】

《①転付峠→千枚岳→荒川三山→赤石岳→樺島》

南アルプスは北アルプスのような華やかさはないが、山一つ一つが大きくて奥深いのが魅力だ。赤石山脈の盟主赤石岳〔3120m〕に初めて登ったのは、ワングル現役時代の 1972 年 10 月「南ア南部 PW」だった。メンバーは、PL 川端さん（16 期）、奥名さん（15 期）、北川さん（16 期）、同期の井上君と僕の 5 名。山梨県側から前衛の山を越え、主稜線を縦走後、静岡県側に下山するという秋の南アルプスを堪能する PW だった。他のほとんどのことは忘れてしまったが、千枚岳〔2880m〕を出発する時の PL の言葉は鮮明に記憶している。日の出 1 時間前、澄み切った濃紫の空には星々が瞬いていた。千枚岳から真南、大井川が大きく挟った V 字谷の底、はるか駿河湾の水平線上にカノープス（全天でシリウスに次いで明るい恒星）が見えた。東海地方での南中高度はわずか 2 度強。出たと思ったらすぐ沈んでしまうので「横着星（おうちゃくぼし）」と呼ばれるくらい、なかなかお目にかかれない星だ。誰かが興奮気味に「あれは竜骨座のカノープスだ」と叫んだら、PL の川端さんが「それは不可能プス」と返した。オヤジ・ギャグに誰も笑わなかった。夜明け前の凍てついた空気が更に冷たくなった気がした。

《②平岡⇒上村⇒しらび峠⇒大沢渡⇒大沢山荘⇒大沢岳⇒百閒洞山の家⇒赤石岳⇒樺島》

二度目の赤石岳は、山の友人と長野県側から小屋泊まりで登った。新幹線豊橋駅で待ち合わせ。平岡からのバスを上村で下車し、タクシーでしらびそ峠〔1833m〕へ。ここから大沢渡へ700m下り、沢から1700m登り返す体力勝負のルートだ。大沢渡から標高差で150mほど上がったところに無人の大沢山荘があった。他に登山者もおらず広い部屋でくつろぐことができた。水場も整備され、なんて素敵なお避難小屋だろうと思った。翌日、大沢岳〔2819m〕を越え百閑洞山の家〔2515m〕に泊まる。宿の主人から前泊の小屋を聞かれ正直に大沢山荘と答えたら、なんと経営者が同じだった。「水場の整備で物入りだね」と言われ、大沢山荘の宿代を泣く泣く払った。現在しらびそ峠から赤石岳へのルートはあまり歩かれず、大沢山荘も荒廃が進んでいるようだ。せめて小屋の水場だけはきちんと使えていますように。

南アルプス南部の山名を冠した日本酒には、『聖岳』（長野県飯田市・喜久水酒造）と『赤石岳』（静岡県島田市・大村屋酒造場）がある。『聖岳』はJR飯田駅前の酒屋でもネット通販でも買えるが、『赤石岳』は手に入らない。噂によれば、夏期のみ営業する赤石岳の小屋でしか入手できないとか。下界で売らず、赤石岳まで酒をボッカするこだわりが凄い。酒好きで体力のあり余っている人はぜひ赤石岳へ。（大村屋酒造場は『赤石岳』の小売りはしていません。ほんとうは、下界では島田市の竹島酒店が唯一『赤石岳』を扱っています。数が少ないので事前に予約して欲しいとのこと。）

【3 下栗再訪】

《飯田⇒矢筈トンネル⇒しらびそ峠⇒下栗⇒上村⇒矢筈トンネル⇒飯田りんご並木》

2018年7月初旬、梅雨の晴れ間を縫って、23年ぶりに独りで下栗を訪れた。飯田駅前でレンタカーを借り東へ向かう。一部完成した三遠南信自動車道の矢筈トンネルを抜けると遠山郷だ。飯田から1時間。下栗の宿が取れなかったのも、しらびそ峠の村営「ハイランドしらびそ」（収容人数90名）に泊まった。眺望は素晴らしく、南アルプスだけでなく、振り返れば中央アルプスや遠く槍・穂高も望めた。宿泊客は3人だったが山荘のスタッフは6人もいて手厚いサービスを受けられた。



＜南アルプス南部のパノラマ（左から荒川岳、大沢岳、中盛丸山、兎岳、聖岳）＞

しらびそ峠から下栗までは南アルプスエコーラインを走る。ガードレールもなく岩だらけだった悪路がきれいに舗装され、快適な40分の山岳ドライブを楽しめた。だが期待して訪れた下栗に昔日の面影はなかった。丁寧に耕されていた急傾斜の畑もところどころ荒れていた。廃屋も目立った。いつもお世話になっていた民宿『井戸端』は、住む人もなくひっそりとしていた。〔下栗人口：1977年83戸330人⇒2017年44戸90人〕

分校（1977年時点で児童数22名）は1987年に麓の上村小学校に統合され、校舎跡には宿泊施設「高原ロッジ下栗」と食事処「はんば亭」が建てられていた。子供たちが元気に遊んでいた校庭は駐車場になり「飯田線の秘境駅と天空の里・下栗を巡る」ツアーバスが停まっていた。分校跡地には二つの石碑があった。それは僕には、この村はこれから“日本の原風景”のテーマパークとして生きていくのだ、という観光立村宣言に思えた。

・『遠山郷下栗の里を日本のチロルと命名する』

（東京学芸大学教授 市川健夫）

・『下栗ほど美しい平和な村を私はほかに知らない』（日本百名山登山作家 深田久弥）

【4 御池山隕石クレーター】

遠山郷は21世紀に入って、日本国内唯一の隕石孔・御池山クレーターで知られるようになった。下栗の北の御池山〔1905m〕で発見された直径900mの隕石孔だ。3万年前に直径50mほどの隕石が衝突してできたと言われている。南アルプスエコーラインは、ちょうどこの隕石孔の内縁部を走っている。飯田市郊外には旧石器時代の竹佐中原遺跡

と石子原遺跡（共におよそ3万年前）が見つかり、伊那谷には太古から人々が住んでいたことがうかがえる。御池山に天から突然巨大な星が降ってきて山が割れるのを目の当たりにし、彼らはこの世の終わりだと思ったに違いない。

もし隕石が西へ20kmずれて伊那谷南部に落下していれば真円の隕石湖が出現し、その隕石湖を天竜川が貫き独特の景観になっていたことだろう。隕石湖と言えば、2016年に大ヒットした新海誠監督アニメ映画『君の名は。』の舞台「糸守（いともり）湖」が連想される。御池山のクレーターではなく、伊那谷南部の旧石器人が全滅し隕石湖が立ち現われた並行世界があるとすれば、『君の名は。』のヒロイン三葉（みつは）のような特殊能力を持つ太古の記憶の伝承者が畔に住んでいて、再びの災厄から人々を救うのかもしれない。

『君の名は。』は、時空を超えた男女とりかえばや物語です。放送が始まる時間になると銭湯の女湯から人が消えると言われた『君の名は。』（1952年NHKラジオドラマ。後に映画化）ではありません。ただ、男女が会えそうで会えないというシチュエーションは似ています。）



<御池山クレーター・見所ご案内看板>



<クレーター（ビューポイントから南西方向）>

【5 飯田讃歌】

2027年の開通を目指しリニア中央新幹線〔品川⇄名古屋〕の工事が始まった。飯田にも新駅が予定されている。たくさんの秘境駅があるJR飯田線とリニア中央新幹線がつながるのだ。東三河・遠州・南信州を結ぶ三遠南信自動車道も中央道飯田JCから南の新東名高速道路へ接続すれば、東西からのアクセスが飛躍的に良くなる。その時、遠山郷へは多くの観光客が押し寄せていることだろう。秘境駅は休日の金沢駅のように観光客で溢れ、「日本のチロル・下栗」の分校跡駐車場はツアーバスで満杯になる。“日本の原風景”を守る為、モンペ姿の急傾斜地耕作特化型AI搭載ロボットが鋤で丁寧に畑を耕している。周囲の景観に溶け込んだヒト型ロボットは夕暮れ時には野良仕事を止め、谷に向かって大きく腰を伸ばす仕草をしてから最寄りの空き家へ行き、静かに充電をする。遠山郷は大きく変わるかもしれない。でも遠くに眺める南アルプスの姿だけはいつまでも変わらないだろう。

劇作家の岸田國士は戦時中、娘の岸田今日子らと飯田に疎開（1944～47年）していた。一家は優しく遇され、岸田國士は帰京に際し讃歌『飯田の町に寄（きし）す』を贈った。飯田大火（1947年4月）で中心街の7割を焼失した市民には、復興へ向けた心強い応援歌になったことだろう。防火帯のりんご並木には『飯田の町に寄す』の碑が建っている。改めてこの碑に向き合うと、リニア中央新幹線の開通により新たな時代を迎える飯田の人々へのメッセージにも思える。

「飯田 美しき町、飯田 静かなる町、飯田 肅然と古城のごとく丘に立つ町」と始まる讃歌は、こう結ばれている。

飯田 天竜と赤石の娘
おんみさかしくみめよく育ちたれど
いま新しき時代に生きんとす
よそほひはかたちにあらず
美しく静かに
ゆかしく豊かに
おんみの心をこそ新しくよそほひたまへ

（初出「飯田市報」第1号1947年6月26日）